



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hoyukai.org/>

第189号

発行:2022年1月15日

発行責任者:

特定医療法人社団 鵬友会

年頭所感

～一丸となってコロナ禍を乗り越える～

医療法人社団鵬友会 常務理事 池島 守



新年あけましておめでとうございます。

昨年猛威を振るったコロナ第5波が急激な感染者減少により終息し、緊急事態宣言も完全に解除されて早2ヶ月がたちますが、宣言解除時に、あるコロナ禍での記事が目にとまり、共感をおぼえたことを思い出します。

その記事を要約すると、「コロナ禍で保健所の存在が注目され、「積極的疫学調査」という言葉を聞いた方は多いと思います。あえて「積極的」と呼ぶところに、普通の調査とは違うのだと感じますが、単に患者の発生連絡を待つのではなく、その病気になった人の生活に立ち入って、行動歴や、人との接触状況を丹念にたどり、感染源を探り、どこまで感染が広がっているのかを追う。コロナが日本に発生して以来、日本の保健所はこうした調査を重ねてきました。そんな保健所でとりわけ積極的に動いた保健所があります。東京都墨田区の保健所です。墨田区はコロナ第5波の嵐が吹き荒れた東京で、重症者も死者も一人もだしませんでした。着目すべき点はいくつもありますが、その中の一つに「積極的疫学調査を緩めなかった」というのがあります。感染拡大のピーク時、一人ひとりの詳しい調査をする余裕がなくなった各地の保健所では、調査を縮小せざるを得ませんでした。しかし、墨田区は手を緩めることは一切しませんでした。こうした取り組みを主導したのが墨田区の保健所長であります。他にも保健所、医師会、医療機関などの「地域の連携力」を効率的に発揮できるよう積極的に動いたことも結果に繋がりました。]

この記事を見たとき、やはり危機的状況には、困難を乗り越えるために力強く引っ張っていくリーダーの存在が不可欠であると感じました。私が思うにリーダーが危機対応で求められる重要な能力とは3つあると感じています。

① 情報処理能力（理解力と分析力）

② コミュニケーション能力

③ やり抜く力（責任感）

危機発生時の状況下では、どの対応が正しくて、どの対応が間違っているかの正解がない場合が多いものです。それでもリーダーは手段を尽くして情報を収集し、そこから判断し、行動し、責任を持ってやり抜くほかないのです。

規模は違いますが、当法人の湘南泉病院は令和2年4月に尿路感染で紹介入院してきた患者さんがコロナ陽性者であると発覚し、その後、入院患者および病院職員に次々と感染し、クラスターとなりました。終息したのは6月末で、その間は大変であったことは言うまでもありません。終息後は、コロナに立ち向かっていく判断をし、コロナ患者を診れる体制を早急に整備しました。コロナ対策の神奈川モデル重点医療機関協力病院としてコロナ患者対応を行い、発熱者外来、横浜市による自宅療養者見守り支援事業への参加、抗体カクテル療法の実施、コロナワクチン接種では、一人でも多くの方に接種していただけるよう、日曜日も含め、毎日のように50名以上の接種を行ってまいりました。振り返ってみると、よくどこまでの体制に持ってこれたなと感じます。これはやはり、リーダーの存在があり、リーダーの主導のもと、各セクションのリーダーが体制作りに動き、現場へ浸透させ、現場も一致団結してくれたおかげだと思います。

今後、オミクロン株の影響により第6波がくることが予想されていますが、当法人は一丸となってコロナ禍を乗り越えていけると確信しています。それが患者さんや地域のために繋がっていることはもちろんです。

本年も新たな活躍に向けて職員一同邁進してまいります。今後ともよろしく申し上げます。



新型コロナウイルスワクチンQ&A Part3

3回目の新型コロナウイルスワクチン接種が医療従事者等に行われていますが、今回、3回目の新型コロナウイルスワクチンについての疑問等を厚生省ホームページからQ&A方式で抜粋させていただきました。



なぜ、追加（3回目）接種が必要なのですか。



日本で接種が進められているワクチンは、高い発症予防効果があり、感染や重症化を予防する効果も確認されています。しかしながら、感染予防効果等は時間の経過に伴い、徐々に低下していくことが、様々な研究結果等から示唆されています。

例えば、ファイザー社のワクチンを接種された人の情報を集めた米国での研究によると、12歳以上における感染予防効果は、2回目接種後1ヶ月以内では88%であったところ、5～6ヶ月後には47%にまで低下したとの報告があります。発症予防効果についても、6ヶ月間の追跡調査の結果、2回目接種後7日以降2ヶ月未満では96.2%であったところ、4ヶ月以降では83.7%であり、経時的に低下していくことが確認されています。また、入院予防効果や重症化予防効果は、2回目接種から6ヶ月後まで維持されるとの報告がある一方、60歳以上において、接種完了から6ヶ月以降で重症例の発生率に上昇傾向が見られたという報告もあります。



追加（3回目）接種ではどのような副反応がありますか。2回目より重いのでしょうか。



ファイザー社のワクチン及びモデルナ社のワクチンいずれの場合も、米国で実施された追加接種に係る臨床試験の結果、追加接種後に確認された様々な有害事象は、2回目の接種後に確認されたものと比較して、その発現傾向は概ね同様であるとされています。

ただし、初回接種時と比較して、リンパ節の腫れの発現割合が高いこと（ファイザー社：5%程度、モデルナ社：20%程度）が、米国で実施された臨床試験の結果の中で報告されています。

なお、米国CDCのデータによると、いずれのワクチンにおいても、追加接種後1週間以内に見られた様々な症状（局所及び全身性の反応や、健康状態、日常生活や勤務への支障等）は、2回目接種後と比較して、その発現割合が低かったとの報告もあります。



追加（3回目）接種では、どのワクチンが使用されますか。
初回（1回目・2回目）接種とは異なるワクチンを使用（交接種）しても大丈夫でしょうか。



追加接種に使用するワクチンは、初回接種に用いたワクチンの種類にかかわらず、mRNAワクチン（ファイザー社のワクチン又はモデルナ社のワクチン）を用いることが適当であるとされています。日本では現在、いずれのワクチンも薬事承認されており、18歳以上の方を対象に順次、追加接種が進められています。初回接種において、ファイザー社、モデルナ社、又はアストラゼネカ社のワクチンを受けた場合、追加接種では初回接種時に用いたワクチンの種類にかかわらず、ファイザー社又はモデルナ社のワクチンのいずれかを使用することが可能です。

